

< 論文 >

ペットと死別した高齢者の適応を支えたもの

: 死別したペットとのContinuing Bondに着目して

横浜国立大学大学院環境情報学府 二階堂 千絵

横浜国立大学 安藤 孝敏

Factors supporting the elderly with pet grief

: Focusing on Continuing Bonds with lost pet

Chie NIKAIDO

Graduate School of Environment and Information Sciences, Yokohama National University

Takatoshi ANDO

Yokohama National University

要旨

近年我が国では少子高齢化に伴い、ペットは家族の一員として重要な存在となっている。そのような中、ペットとの死別とそれに伴う悲嘆についても注目されるようになった。本稿では、ペットと死別した高齢者への2つのインタビュー調査から、ペットとの死別による悲嘆の適応を支える要因を抽出することを試みた。研究1では飼い主の適応の支えとなる要因を抽出し、質的に検討した。その結果、4名の調査協力者は皆、家族や友人などから社会的支援を受けており、亡くなったペットに対しては火葬・納骨などの儀式を行う、供花する、写真に話しかけるなどの行為が見られた。これらの行為は“継続する絆: Continuing Bond”と呼ばれ、亡くなった対象との分離を目指すグリーフワークモデルとは異なった、新しい形の悲嘆への適応のしかたとして注目されている。そこで研究2では亡くなったペットと飼い主のあいだの“継続する絆”の詳細について質的に記述・検討した。これら2つの研究から、今後の課題として、亡くなったペットと飼い主の継続的な絆の特有さ、世代を軸とした調査とペットロスにおける継続する絆の機能についての調査の必要性が示された。

ABSTRACT

In recent years in Japan, with declining birthrates and an aging population, pets have become important members of the family. Under these circumstances, the grief that accompanies the bereavement of a pet has come to light. In the current research, we conducted interviews of the elderly who had lost their pets in order to identify factors that support adaptive pet grief. The first study explored the factors supporting for the adaptive pet grief, with data analyzed qualitatively. The results showed that, all pet owners had support from their family and friends. In addition, the bereaved had a relationship with their lost pet that continued after the death of the pet, in some form, —pet cremation, the offering of flowers to the deceased, or recalling the lost pet. These actions are characterized as a continuing bond (CB), and CBs have been attracting attention as a new concept for understanding adaptive grief, different to the grief work model that describes the separation from the departed as a goal.

The second study examined and described in more detail the CB between owners and pets. The present research is a novel examination of the role of CBs in the relationship between the owner and the deceased pet, with a focus on the generation of the owner. Future research is needed to detail the role of CBs in pet grief.

1. 問題と目的

1.1. ペットの家族化とペットロス

現在わが国では多くの動物がペットとして飼育されている。2010年の時点で、飼育されている犬・猫の頭数は15歳以下人口を上回っており(ペットフード協会、2010)、ペットの役割も変化した。内閣府の世論調査によると(内閣府、2010)、“ペット飼育がよい理由”の回答として最も多かったのは“生活に潤いや安らぎが生まれる”というもので、それに次いで“家庭がなごやかになる”“子供が心豊かに育つ”“育てるのが楽しい”

といった回答が続いている。一方、同じく内閣府による平成15年の世論調査(内閣府、2003)では飼育理由の上位にあった“留守番や防犯に役立つ”という理由は減少傾向にある。ペットの役割が生活に役立つ道具的なものから、親密な関係を希求する対象、家族の一員へと変化していると見てよいだろう。

このようなペットの家族化・ペット飼育の一般化に伴い、ペットとの死別体験とそれに続く悲しみと喪失感、いわゆるペットロスも一般的なこととみなされるようになってきた。ペットロスという言葉が我が国で知られる

ようになって10年以上が経ち、関連する書籍も数多く出版されている。

しかし、ペットと死別した後の飼い主の心的過程について注目されるようになってきたのは比較的最近のことである。ペットロスに伴う悲嘆とそれに関連した症例は1977年に初めて報告されたが、喪失研究や悲嘆研究の流れの中において、ペットとの死別は、“小さな喪失”や“公認されない死”など、一般的な悲嘆とは区別されたものとみられてきていた(Doka, 2008)。しかし徐々に研究が蓄積され、飼い主が喪失を受容するまでの過程において、抑うつや不安、悪夢などの精神症状、睡眠障害や頭痛などの身体化症状が現れることが知られている。

1.2. 「ペットロス」以前のペットロス

また、当然ではあるが、ペットロスという言葉自体がまだ存在しない頃から、ペットとの死別とそれに伴う悲嘆は現象としてはあったと思われる。

例えば『ノラヤ』(内田, 1957)で綴られた、失踪した飼い猫の捜索に奔走し、死にそうな飼い猫を手厚く看病したのちに別れの時を迎えた内田百閒が綴る悲しみは、ペットロスの渦中にある飼い主の心持ちそのものである。また、小説『深い河』(遠藤, 1993)でもモチーフとして描き、自分と動物との関わりを綴ったエッセイ(遠藤, 2003)でも自ら触れている、作家・遠藤周作と愛犬クロとの今生の別れは、生別ではあるものの、これもまた哀切極まりなく、その別れが遠藤自身の人生観に大きな影響を与えたことも見てとれる。どちらも、ペットロスという言葉がない時代のことではあるが、これらの作品はまさに当事者によるペットロス体験記と言えるだろう。動物飼育者にとって寿命の短いペットとの別れにおける悲嘆は「ペットロス」という言葉が作られる前から自明のものであり、ペットとの死別体験は、昔も今も、飼い主たちの精神活動に少なくない影響を与えてきたことが推察される。

1.3. ペットロスの多局面—高齢者とペットロス

このように、実は古くて新しい現象であるペットロスだが、ペットとの関係性の質も含め、その悲嘆の適応過程には、ペットの死の形態、過去の喪失体験の有無と質、年齢・年代や性別、家族構成などの個人的要因、本人を取り巻く社会関係などの要素が互いに影響しあい、複雑に絡み合いながら進行することについては、

すでに議論されている(倉原, 2007)。

例えば年代別に考えると、高齢者にとっては、経験してきた数多の死のうちの一つという見方ができるかもしれないが、子どもにとってペットとの死別体験は、初めて“死”というものを知る、大きなインパクトを残すものになり得るだろう。

かつて朝比奈(2002)は、ペットとの死別を体験したことのある青年期の人々へのインタビュー調査から、青年期にある人々がペットとの死別をどのように体験するのかということを明らかにした。その中で「また新たにペットを飼いたいのか」という問いに対する回答は積極的なものから否定的なものまで様々であったにもかかわらず「自分の子どもがペットを飼いたいと言ったら、あなたはそれに賛成するか」という問いに対しては、すべての協力者が賛成すると答えた。この研究では、悲嘆や喪失感だけにとどまらない、死別も含めたペットとの生活について、前向きに意味づけていこうとする青年期特有の未来志向が垣間見えた。

ところで、今現在我が国で犬および猫の飼育率が最も高いのが50代、次いで60代となっている(ペットフード協会, 2013)。人生の秋冬を迎えた中高年者・高齢者にとって、ペットとの死別はどのような意味をもたらすのだろうか。そして高齢者は何を頼りにペットとの別れによる悲しみを癒しているのだろうか。

Smith, Seibert, Jackson & Snell (1992)は、現在ペットを飼育している、あるいは過去に飼育していた60歳以上の高齢者が、先に亡くなるか障害をもった時に、ペットを飼うかどうかという点と、家を選ぶときの決定要因にペットがなっているかどうかということについて、質問紙調査とインタビュー調査をしている。それによれば、以前ペットを飼っていた回答者は、自分がペットより早く亡くなる可能性について尋ねられると、そのことを新たなペットを飼わない理由にし、今ペットを飼っている人の半数は「もし現在飼っているペットが死んだら新たに飼う予定はないし、他のペットを世話することもできない」と回答したという。

安藤(2001)も、過去にペットを飼っていた70～79歳の高齢者の約4人に1人(26.3%)がペットロスを経験していること、特に比較的飼育期間の長いペットを亡くしていること、その後ペットを飼っていない者が半数以上いたとしている。

高齢になると新たなペットを飼い始めることをためらうことの原因としては、Smith et al. (1992)が示唆し

たように、自分が先立ってしまう可能性の強さや、体力の衰えにより世話が十分にできなくなる恐れがあることなどが考えられるであろう。

これは青年期におけるペットロスについての朝比奈(2002)の研究結果と比すると、新たなペットを迎えることを検討できるか否かという点において、大きな違いがあると言えるのではないかと。

未だ原家族に属す青年期の若者の多くは一般的に、社会関係が豊かであり、基本的に未来志向であろう。一方、高齢者は人生の秋冬を迎え、度重なる死別や喪失により社会関係は減っていき、さらには自らの人生の終焉を意識せざるを得ない位置にある。高齢者にとって、ペットとの死別は、それらを際立たせる出来事になり得るのではないかと。

こういった状況を受けて、松原・城(2002)は、『強い紐帯』『弱い紐帯』をキーワードとしたインタビュー調査において「犬と飼い主」という二者関係と「犬を通して広がる人間関係」の二つのありようを記述し、その中でペットロスについても触れている。そして、高齢者のペットロスとその後の適応を促進する第一の手立てとして、新たなペットを飼育することを挙げ、高齢者が新しいペットを飼い始めることを後押しすることの必要性を説いている。そのために、飼い主の体力が衰えた時や死後に際し、ペットを引き取ってくれる制度や組織を作っていくことを提言している。また他方で、ペットによらず、高齢者がペット以外にも積極的に関われる他者や対象を広く持ち、その力を発揮できる機会を多く持つことが必要であるとしている。

この研究でのペットをめぐる飼い主の社会関係に関する考察は非常に興味深い。しかし、ペットロスの悲嘆の適応に、新たなペットとの出会いが必ずしも必要とは限らない。またこの研究では、ペットとの死別体験を、高齢の飼い主本人がどのように扱っているのか、その飼い主の適応過程や悲嘆への対処方略など、飼い主の個人内変化にまでは言及されていない。

そこで本研究では、ペットとの死別体験後的高齢者の心的過程において、特にペットを亡くした高齢者を支えたものについて、インタビュー調査を通して明らかにすることを目的とする。

そのために研究1では伴侶動物を亡くした高齢者が、ペットロスによる悲嘆からの適応過程で、何らかの支えを得られたか、得られたとするならばそれは何だったかということを探ることを目的とし、研究2では、研

究1で探り当てた適応要因の中の一つ、Continuing Bondに注目し、亡くなったペットと飼い主のあいだのContinuing Bondがどのような形で現れているのかということについて調査・分析を進めた。

2. 研究1

2.1. 目的

伴侶動物を亡くし、その悲嘆からの適応過程にあると思われる高齢者が、死別の悲しみを癒す中で得られたサポートの有無とその内容を質的に検討する。

2.2. 対象と方法

本研究では、研究方法としてインタビュー調査を採用した。これは、多人数に対して標準化された質問様式では、死別による悲嘆という個々人によってさまざまに表現される事象の詳細をとらえきれないと考えたためである。

調査協力者募集については、調査時より過去1年以内に、飼い犬と死別した65歳以上の方という条件で、調査会社に依頼した。上記条件の設定理由は、喪失時の記憶が鮮明であることと、亡くしたペットの種類の違いによる結果の差異が出ないようにすることが必要とされたからである。

その結果、条件に合致する方が3名、年齢以外は条件に合致する方が1名、計4名が調査協力の意思を示してくださり、4名全員にご協力いただくこととした。

インタビューは、事前に作成した質問ガイドにそって、インタビュアーとサブインタビュアーの2名が実施した。調査時間は平均して約1時間程度であり、インタビュー内容は研究協力者の了承を得て、適宜メモを取りながら録音した。

倫理的配慮として、調査協力者には事前に協力していただく内容について説明し、自由意志による回答を損なわないために、語りづらいことは語られなくてよいこと、インタビューを中止したいと思われた時にはその意思を尊重すること、発言した内容の訂正・削除は調査のどの段階においても可能である旨をお伝えした。

また、インタビューの内容については後に逐語録を作成するが、その際には協力者個人が特定されないよう加工すること、研究結果を文章化するときにはお話しいただいたことを誤りなく伝えるために、直接話法で引用させていただくこともあるが、その際には逐語録作成時と同様に加工を施し、協力者のプラ

イバシー保護を徹底することを伝えた。

質問ガイドの項目は「飼い始めたきっかけ」「生前のエピソード」「亡くなる時のこと」「亡くなってから今までの心境」であった。

調査終了後録音データを書き起した逐語録を繰り返し読んで「ペットの死後心の支えになったこと」について、個々の語りを一つ一つ精査した。その後文脈に沿って下位カテゴリーを抽出したあと、その内容を検討しながら統合し上位カテゴリーとしてまとめた。

カテゴリー抽出についてはM-GTAを参考にしつつ、協力者の語りの切片化は、単語の意味だけではなく語りの文脈を重要視して行った。

2.3. 調査協力者

調査協力者の詳細は以下の通りである。なお、個人の特定に関わる情報はあらかじめ調査結果に影響の出ないと思われる範囲で改変してある。

① 春田さん

60歳女性、医師。長男はすでに独立、次男・三男、夫の4人暮らし。インタビューの半年前マルチーズの雄と死別（リンパ腫のため）。現在は何も飼育していない。

② 夏川さん

65歳女性、独居、カルチャー教室運営。2匹いたイタリアングレーハウンドのうち1匹と死別（心不全による突然死のため）。現在は犬1匹を継続飼育。

③ 秋山さん

84歳女性、独居、無職。夫とは死別。柴の雑種と死別（老衰のため）。現在は飼育していない。

④ 冬月さん

65歳男性、会社役員。妻と2人暮らし。2匹いた雑種犬（大型）のうち1匹と死別（心不全による突然死のため）。現在は犬1匹を継続飼育。

2.4. 結果と考察

「ペット亡き後何が心の支えとなったか」という問いへの答えから、「ペットの死後心の支えになったこと」を示す19個の下位カテゴリーと、7個の上位カテゴリーが抽出された（表1）。

2.4.1. 適応要因としての社会関係

4名の調査協力者全員から語られていたのは「社会的支援」で、主に家族や友人、散歩仲間、また時に

は会社の部下による慰問や哀悼の意を受けて、悲しみを受け入れていく姿が読み取れた。特に、別居している子や孫の訪問が増えたことは多く語られ、ペットとの死別によりこれまでの人間関係が活性化される側面があることがうかがえる。

また、複数飼育をしていた夏川さんと冬月さんは、調査当時、生存している犬とともに暮らしていた。両者とも散歩やえさやりなどの生活リズムを崩さず、また、散歩コースも特に変えずに過ごしているとのことだった。そのように「今いるペット」とともにある時間を大切にすることは二人にとって大きな支えになっており、亡くしたペットの分も今共に暮らすペットに愛情をかけようという思いも語られていた。また、彼らは時に、飼い主が亡くなったペットを偲ぶ時の伴侶にもなっていた。

調査協力者4名のうち3名は仕事を持ち、ペットを亡くしても仕事をし続けていた。日常生活を送る中で仕事も含めて「多忙」な時間を過ごすうちに、それが「時薬」となって、鋭い痛みを伴う強い悲嘆から、ペットの不存在に慣れていくさまが語られた。

犬が長く患った方も、突然に倒れた方も、獣医療関係者との関係は良好だった。特に、獣医師の適切な対応とペットの死後に受けた配慮（ペットの看取りや火葬の手配を請け負う、死の原因を推定し、飼い主の落ち度ではないことを伝えるなど）は、飼い主の気持ちを慰めることに役立っていた。

今回の調査では「ペットロス後」のことに注目したためカテゴリー化の対象からは外したが、獣医師によるサポートは主に看取りの前後から死別後にかけてのことが言及されていた。このことから、獣医師によるサポートは、他の「社会的支援」に先駆けて行われることが推察される。

2.4.2. ペットの死後も続く思い

抽出したカテゴリーの中でも、特に注目すべき点として、調査協力者全員が直接間接に、犬の死に対して何らかの「儀式」を行なっていることが挙げられる。茶毘に付したあと骨壺に写真・花を飾る、飼い始めた頃に住んでいた場所にお骨を埋葬するなどの人間さながらの儀式から、自分で法名を考えて名付けるというユニークなものまであったが、そういった儀式をすることにより、その人なりの気持ちの区切りをつけているものと思われる。

表1 ペットの死後心の支えになったこと

上位カテゴリー		下位カテゴリー	
カテゴリー名	内容	カテゴリー名	内容
社会的支援	家族や友人からの訪問やサポート	子どもからのサポート	ペットの死後、子どもから、火葬の手配、訪問、慰めなどを受ける
		友人からのサポート	ペットの死後、友人や散歩仲間からの慰め・慰問を受ける
		会社の部下からのサポート	ペットの死後、会社の部下から、火葬の手配、慰めなどを受ける
儀式	ペットを用うための儀式をする	火葬	亡骸を火葬する
		遺骨を身近に置く	遺骨を自宅に安置する
		納骨・埋葬	遺骨をお寺に納骨したり、ゆかりのある場所に埋葬する
		祭壇を設ける	室内に祭壇をしつらえる
		戒名を付ける	亡くなったペットに自分が信じている宗教にのって死後の名前を付ける
時薬	時間の経過	時間の経過	時間が経つことにより、強い悲しみやショックが和らぐのを待つ
多忙	日々の多忙さにより気持ちが紛れる	仕事と日常の多忙さ	仕事や日常の忙しさで悲しみが紛れる
哀悼	亡くなったペットに思いを馳せる	遺骨にペットの存在を見出す	亡くなったペットの遺骨がそばにあることで、ペットがまだそばにいるような気持ちになる
		冥福を祈る	写真や遺骨に手を合わせたり、線香を上げたりして、亡くなったペットの冥福を祈る
		写真を飾る	亡くなったペットの写真を飾る
		遺骨や写真に声をかける	遺骨や写真に話しかけたり、朝夕や出入りの挨拶をしたりする
		亡くなったペットの存在を感じる	身の回りに起こった不思議な出来事を、亡くなったペットによるものと思う
今いるペット	現在共に暮らしているペットとの関わり	思いをこめる	亡くなったペットの分まで愛情をかけようと思いつつ関わる
		犬のいる日常	散歩や旅行など、犬がいる生活を送る
獣医師の関わり	獣医師によるサポートや関わり	獣医師によるサポート	看取り、火葬の手配を獣医師が担当
		死因の推定	死因を推定し、飼い主の自責感を軽減する

さらにどの協力者も「儀式」を終えた後、身の回りで起きた不思議な偶然に、亡くなったペットの存在を関連付けたり、亡くなったペットの写真に毎日手を合わせたり、亡くなったペットのことについて残ったもう1匹のペットに語りかけたりしながら「哀悼」する姿があった。

ところでこの、写真に毎日手を合わせるなどの、ペットの死後もその亡くなったペットに心を寄せ続けるというのは、日本特有の悲哀の持ち方であるようである。

例えば、日米の未亡人のたどる心理過程の比較を行った Yamamoto, Okonogi, Iwasaki & Yoshimura (1969) は、日本人は故人との分離意識がやや曖昧な死生観を持ちやすいことを指摘している。

また、家の中に仏壇をしつらえて故人を祀り、毎日花や水を供えて故人と対話するといった振る舞いは、フロイト (1970) に端を発し、故人との分離を目標とするグリーフワークモデルが主流であった中、非常に斬新なこととして受け止められたようである。

2.4.3. Continuing Bond Theory とペットロス

この視点は現在 Klass, Silverman, & Nickman (1996) によって理論化された Continuing Bond Theory というモデルの中核となっている。

Continuing Bond Theory とは、死別した人が故人との愛着を維持し続けることが多く、それが死別への良い適応に不可欠であるとする説である。多くの研究は故人との「継続する絆 (Continuing Bond)」が、正常で適応的であることを示している (Klass et al. 1996; Atting, 1996)。例えば、Silverman & Worden (1993) は、ボストンでの親と死別した 6 ~ 17 歳の子どもを対象とした研究で、絆の継続と良好な健康との関連を見いだしている。子どもたちは、形見を持つこと・墓を訪れること・故人について考えることなどによって、故人との関係を継続し続けており、親の形見を身につけるなど、絆を保持することの意義が論じられた。また坂口 (2007) は、継続する絆に、先述のような文化差があることを踏まえつつ、日本人遺族にとっての Continuing Bond = 継続する絆の内容と、遺族たちの精神的健康の関連について調査をしている。それによれば、日本人遺族は継続的な絆を持ちやすく、故人の存在や、故人から見守られているとの思いを抱く割合が高いこと、そしてその思いを長期にわたって持続させる傾向があることが示唆されたという。

これらに照らすと、研究 1 で得られた「儀式」と「哀悼」というカテゴリーは、飼い主たちはいずれも亡くしたペットとその死後も絆を保持していたのではない。

また、本研究の調査協力者だけに限らず、昨今はペットの葬儀や納骨は一般的なことになりつつあり、遺骨を肌身離さず所持するためのペンダントや写真・絵など、亡くなったペットの思い出を残すための作品制作サービスなどもすでに存在する。これらは継続する絆の存在を表す一端であると言えるだろう。

そこで研究 2 では、これらの事柄から、飼い主と亡くなったペットのあいだには、遺族と故人と同様に、継続する絆が存在することを前提として、亡くなったペットと飼い主の継続する絆はどのような形で現れ、どのようにその人の心的過程に影響するのかということについて明らかにする。

3. 研究 2

3.1. 目的

ここでは、ペットとの死別からの適応過程において、

ペットとの間で継続する絆 Continuing Bond がどのような形で表れているか、死別者の喪失後の心的過程にどのような影響を与えているかということについて、ペットを亡くした高齢者の語りから、カテゴリー抽出を通して明らかにすることを目的とする。

3.2. 対象と方法

インタビューは事前に作成した質問ガイドにそって、インタビュアー 1 名が実施した。調査時間は平均して約 1 時間程度であった。インタビュー内容は調査協力者の了承を得て、適宜メモを取りながら録音した。

調査協力者の募集については、調査時より過去 3 年以内に犬と死別している 60 歳以上の方という条件で調査会社に依頼したところ、11 名の方に調査協力の意思を確認できた。その後 11 名と、同伴された配偶者の方 1 名を加えた 12 名のインタビューを実施した。その逐語録を読み返していく中で、亡くなったペットとの継続する絆について最も豊かに語っていると思われた 1 名の方の語りを分析対象に選定した。

倫理的配慮として、調査協力者には事前に協力していただく内容について説明し、自由意志による回答を損なわないために、語りづらいことは語られなくてよいこと、インタビューを中止したいと思われた時にはその意思を尊重すること、発言した内容の訂正・削除は調査のどの段階においても可能である旨をお伝えした。

また、インタビューの内容については後に逐語録を作成するが、その際には協力者個人が特定されないよう加工すること、研究結果を文章化するときにはお話しいただいたことを誤りなく伝えるために、直接話法で引用させていただくこともあるが、その際には逐語録作成時と同様に加工を施し、協力者のプライバシー保護を徹底することを伝えた。

質問ガイドの項目は、研究 1 と同様の「飼い始めたきっかけ」「生前のエピソード」「亡くなる時のこと」「亡くなってから今までの心境」の 4 つに新たに「ペット亡き後、何が心の支えとなったか」を加えたものを使用した。これは、より明確に、何が自らを支えたかということについて調査協力者自身の言葉で語っていただくためである。

調査終了後録音データを書き起した逐語録を繰り返し読んで「ペットの死後支えになったこと」について、語りを精査した。その後文脈に沿って「亡くなったペットと飼い主の Continuing Bond」についての下位カテ

ゴリーを抽出したあと、それを統合して上位カテゴリーとしてまとめた。

カテゴリー抽出については M・GTA を参考にしつつ、協力者の語りの切片化は、単語の意味だけでなく語りの文脈を重要視して行った。

3.3. 調査協力者

調査協力者は、岩崎元さん（仮名、調査当時 64 歳）である。飼い犬であったウェルシュコーギー・ペンブロー

クの“もも”と、ももが 13 歳の時に間質性肺炎により死別した。現在は妻とももが生んだ 2 匹のコーギーと暮らしている。娘二人とは別居中である。

3.4. 結果と考察

「ペット亡き後何が心の支えとなったか」という問いへの答えから、Continuing Bond を示す 11 個の下位カテゴリーと 5 つの上位カテゴリーを抽出した（表 2）。

表 2 亡くなったペットと飼い主との Continuing Bond

上位カテゴリー		下位カテゴリー	
カテゴリー名	内容	カテゴリー名	内容
忘れ形見との暮らし	もものことを思いながら、ももの子どもたちと暮らす	似たところを見出す	ももの子どもたちの中に、ももと似ている性質を見出す
		違いに気付く	ももと子どもたちの違い、個体差に気付く
儀式	弔いの儀式をする	火葬	亡骸を荼毘に付す
		供物	遺骨に手製の地藏やおやつを供える
		供物	遺骨をお寺に納める
遺骨を身近に置く	ももの遺骨を手元においておく	自宅に安置	遺骨を自宅に安置する
		ロケットに入れる	遺骨を入れたロケットペンダントを作成する
写真を飾る	写真を飾る	写真を飾る	自宅の目につくところに写真を飾る
思いを馳せる	もものことを思い出したり、この場にももがいたら、と仮想する	自発的に思い出す	かつてももがいた頃のことや死ぬまでのことを思い出す
		他者によって思い出す	他者によるももの思い出話や他者から“ももパパ”と呼ばれることなどによって、もものことを不意に思い出す
		仮想する	この場にももがいたらどうなのかな、と想像する

3.4.1. 継続する絆としての「忘れ形見との暮らし」

現在ももが遺した子どもたちと暮らしている岩崎さんにとっての何よりの支えは、ももの忘れ形見である犬たちであった。帰宅すればももの代わりに子どもたちが岩崎さんを迎え、彼らの散歩にも今迄通り出かけるのである。

ももが回復するために手を尽くした後はペット葬儀社に依頼して、亡骸を荼毘に付すなどの「儀式」も行った。しかしすぐには納骨する気持ちになれなかったため、遺骨を入れるロケットペンダントを家族全員分作成して遺骨のかげらをそこに納め、残りの遺骨は自宅に安置していた。やがて近所の散歩仲間から、気持ちに区切りをつけるために納骨を勧められ、勧められるままに納骨をした。その後はトイレや階段など、目につきやす

いところにももの「写真を飾」って、それを見るたびにひとりなりし日のもものに「思いを馳せ」たり、時には家族や散歩仲間、ももの子どもたちとももの思い出を語り合ったりしながら、日々を過ごしているとのことであった。

Klass et al.(1996)による Continuing Bond Theory を参照すると、岩崎さんの語りの中から得られた「継続する絆」に相当すると思われるカテゴリーは、「儀式」、「遺骨を身近に置く」、「写真を飾る」、「思いを馳せる」の 4 つである。

「忘れ形見との暮らし」も亡くなったペットを思い起こすことにつながっていることから、継続する絆に相当することも考えられるが、このカテゴリーが出現するためには、亡くなったペットが繁殖可能であったことや亡

くしたペットの子を手元に置いておけるという特殊な条件が必要であるため、一般的なペットと飼い主の継続する絆を示しているとは言い難い。しかし、寿命の短い動物との死別は人と比べて早期に訪れることや、遺された犬たちは岩崎さんにとって、形見であると同時に、ももの思い出話を語る他者でもあったことを考えると、これはペットの飼い主特有の事象と言えるのではないか。

3.4.2. 絆が継続することの両価性

また、下位カテゴリーを抽出していく中で、繋がり方が継続することの良さとしんどさは表裏一体であることが分かった。

例えば、「思いを馳せる」「遺骨を身近に置く」ことはペットを身近な存在として感じ、喪失感を薄める支えになっていたという。しかし「他者によって思い出す」ことや、遺骨を納骨するようにと他者から勧められたりすることについては、明確にそのつらさを口にしていた。

このことについての考察には、新島(2001)を援用できるだろう。それによれば、ペットを“非常に重要な他者”とする飼い主のリアリティに周囲は同調し、一見自己-他者関係におけるリアリティの分離が生じていないように見えても、リアリティの多様さ故のリアリティの分離、つまりずれは存在するという。そして各個人間のわずかなずれは、ペットを喪失した時に顕在化し、ペットを亡くした飼い主の辛さは一層増すのである。岩崎さんとももの継続する絆のありようについても、他者と岩崎さんのあいだでリアリティのずれが現れ、それにより岩崎さんが苦痛を感じたのではないだろうか。

また、「忘れ形見との暮らし」についても、亡くなったペットの子どもたちの存在や、彼らとの暮らしには癒されているものの、逆に亡くなったペットと今いる犬との「違いに気付く」ことで、喪失感が露わになるといったことも語られた。これは、継続的な絆が必ずしも適応的な表現にはならないことを示唆するのではないだろうか。

4. 総合考察

研究1においては、ペットを亡くした高齢者が適応していく過程を左右する要因として、家族や友人、獣医療関係者などからの支援、時間経過などとともに、死別したペットと飼い主のあいだに、継続する絆があることが推察された。研究2は、研究1を受けて亡く

したペットとの継続する絆について詳細に検討し、亡くしたペットとの継続する絆が、死別した高齢者の適応過程において重要な役割を果たしていることを示唆するものである。

研究1・2共に代表性の強いデータではなく、理論的飽和にいたっているとは言えないため、性急な結論付けは避けるが、本研究から得られた知見を総合的に考察するとともに、今後の課題と展望を考えてみたい。

4.1. 犬がいる生活を継続することの恩恵

まず、本研究で得られた新たな知見として、研究1における複数飼育者にとっての「今いるペット」の存在と「忘れ形見との暮らし」の大きさが挙げられる。

小杉(2002)はペットロスによる苦痛を緩和する事前策として、調査に協力した獣医師のほとんどが複数飼育を勧めていることを明らかにしたが、複数飼育とペットロス後の適応についてはこれまでのところあまり議論されてきていない。

複数飼育がペットロスによる重篤な悲嘆を防ぐ理由としては、残ったペットとの情緒的な交流が第一に思い浮かぶが、研究1では、それだけでなく、散歩やペットとの交流などの生活習慣や生活リズムも含めた、犬がいる日常生活がペットロス後も続くことが、飼い主の適応を支えている可能性があることが示された。さらに研究2でも、亡くなった犬の形質を受け継いだ「忘れ形見との暮らし」が適応的に働いている面があった。

1匹のペットを喪うことで、生活リズムや習慣、社会関係が一変することがその後の適応の妨げになるとすれば、複数飼育をしていた場合には、ペットロスが生活そのものに及ぼす影響はより小さくなり得るのではないか。

ペットと死別したあとの適応に大きく寄与する要因として、新たなペットを飼うことについてはすでに議論されている。同様に、複数飼育していた中の1個体が亡くなった後、他のペットをこれまでと変わらずに飼育していくことの意義や、そのことがもたらすものについて、詳細な検討の俎上に上げる必要があるだろう。

4.2. 継続する絆の質の検証

第2に、亡くなったペットとの継続的な絆が、飼い主にとって常に適応的に機能するかどうかという点である。

先にも述べたが、研究2において調査協力者によっ

て語られた、「忘れ形見との暮らし」には、適応促進的な面がある一方、喪失感が強調されるというエピソードも聞かれ、継続的な絆の不適応的な側面を想像させる。

Field (2008) は、継続的な絆の表現のタイプが、遺族が死別に適応できたかを判断する指標になり得ると述べている。また、Boelen, Stroebe, Schut & Zijerveld (2006) は、記憶を通しての慰めは、時間経過による悲嘆の減衰が少ないことを予測した。これは、死後時間が経つとどんな形の継続する絆であれ、過剰なかかわりは適応的でないことを表しており、その場合には、関与のタイプよりも関与の程度それ自体が意味を持つと考えられるという (Field, Gal-Oz & Bonanno, 2003)。

今後はペトロロスにおける様々なタイプの継続的な絆を洗い出し、ペットを失った飼い主の心的過程の中でそれがどのように機能しているか、より精緻に記述し解明する必要があるだろう。

4.3. 継続する絆の世代性

第3に、世代を軸とした調査の必要性が挙げられる。

今回の研究では、ペットを亡くした高齢者にインタビュー調査を行った。我が国では、遺族が仏壇に話しかけたり、お供えをしたりすることはありふれた事象だが、そのような宗教的な習慣は、若年者よりも高齢者の方がなじみ深いものかもしれない、その結果として、継続する絆に相当するようなふるまいが顕著に現れた可能性も否定できない。若年者も同様に、既存の宗教的な習慣とは異なった、その世代なりのスタイルで絆を継続させていることも考えられる。

こういった継続する絆の世代による差異を検証するためには、他の世代の飼い主と亡くなったペットとの継続する絆についても調査する必要があるだろう。

本稿は平成20～22年度文科省科研費補助金(基盤研究C:「コンパニオン・アニマルとの生活が高齢者の精神的健康に及ぼす影響」、課題番号:20530625、研究代表者:安藤孝敏)を受けて実施された研究の一部である。

謝辞

本研究のために、涙とともに貴重な経験についてお話し下さった調査協力者の皆さまとその愛犬たちに、

心から感謝と哀悼の意を表します。また、協力者の皆様をご紹介くださった株式会社ウェルズの井上康子様、分析・検討に協力してくださった安藤研究室所属の大学院生および修了生の皆さまに、厚く御礼申し上げます。

そして、陰に日向に私を支えてくれた夫と娘、執筆する私に常に寄り添い、2015年1月に急逝した私の愛犬ジョイにも、感謝したいと思います。

引用文献

- 安藤孝敏 (2001) 「高齢者とペット動物」『老年社会科学』23, 25-30.
- 朝比奈千絵 (2002) 「青少年期における飼育動物の喪失(ペトロロス) 体験に関する探索的研究」『教育臨床心理学研究』5, 181-194.
- Atting, T. (1996) *How we grieve: Relearning the world*. New York: Oxford University Press.
- Boelen, P. A., Stroebe, M. S., Schut, H. A., & Zijerveld, A. M. (2006) "Continuing bonds and grief: A prospective analysis." *Death Studies*, 30, 767-776.
- 遠藤周作 (1993) 『深い河』講談社
- 遠藤周作 (2003) 『我が最良の友 動物たち』グラフ社
- Doka, K.J. (2008) "Disenfranchised grief in historical and cultural perspective." In M. S. Stroebe, R.O.Hansson, H. Schut, & W. Stroebe, (Eds), *Handbook of bereavement research and practice: Advances in theory and intervention*. pp. 223-240. Washington, DC: American Psychological Association.
- Field, N.P. (2008) "Whether to relinquish or maintain a bond with the deceased." In M. S. Stroebe, R.O.Hansson, H. Schut, & W. Stroebe, (Eds), *Handbook of bereavement research and practice: Advances in theory and intervention*. pp. 113-132. Washington, DC: American Psychological Association. (森茂起・森年恵訳(2014) 「絆を手放すべきか、維持すべきか」『死別体験—研究と介入の最前線』誠信書房, pp.99-122.)
- Field, N. P., Gal-Oz, E., & Bonanno, G. A. (2003) "Continuing bonds and adjustment at 5 years after the death of a spouse." *Journal of consulting*

- and clinical psychology*, 71, 1-8.
- フロイト S. 井村恒郎・小此木啓吾訳 (1970) 「悲哀とメランコリー」『フロイト著作集・第6巻』人文書院, pp.137-149.
- Klass, D., Silverman, P. R., & Nickman, S. (1996) *Continuing bonds: New understanding of grief*. Washington, DC: Taylor & Francis.
- 小杉正太郎 (2002) 「ペットロスに関する心理学的検討」『アニマル・ナーシング』7, 8-13.
- 倉原亜紀子 (2007) 「ペットロス—最後の贈り物—」若島孔文 (編著) 『犬と家族の心理学—ドッグセラピー入門—』北樹出版社, pp.82-104.
- 松原崇・城仁士 (2002) 「犬の飼育が中高年期にもたらす意義」『神戸大学発達科学部研究紀要』10, 161-169.
- 内閣府 (2003) 『動物愛護に関する世論調査 (平成15年7月)』[<http://www8.cao.go.jp/survey/h15/h15-doubutu/>] (2014年9月15日)
- 内閣府 (2010) 『動物愛護に関する世論調査 (平成22年9月調査)』[<http://www8.cao.go.jp/survey/h22/h22-doubutu/>] (2014年9月15日)
- 新島典子 (2001) 「ペット喪失体験 (ペットロス) はなぜこんなにつらいのか?—リアリティ分離・封殺とペット喪失者のつらさの強化について—」『現代社会理論研究』11, 225-238.
- ペットフード協会 (2010) 平成22年 全国犬猫飼育実態調査 [http://www.petfood.or.jp/data/chart2010/index.html] (2014年9月15日)
- ペットフード協会 (2013) 平成25年 全国犬猫飼育実態調査 [http://www.petfood.or.jp/data/chart2013/index.html] (2014年9月15日)
- 坂口幸弘 (2007) 「日本人遺族に応じた遺族ケアのあり方に関する研究: 故人との「継続する絆」」『平成18年度日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団調査・研究報告書』, 33-40.
- Silverman, P. R., & Worden, J. W. (1993) "Children's reactions to the death of a parent." In W. Stroebe, M. Stroebe, & R. O. Hansson, (Eds.), *Handbook of bereavement: Theory, research, and intervention*. pp.300-316. Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, D. W., Seibert, C. S., Jackson, F. W., & Snell, J. (1992) "Pet ownership by elderly people: Two new issues." *The International Journal of Aging and Human Development*, 34, 175-184.
- 内田百閒 (1957) 『ノラヤ』文芸春秋新社 (内田百閒 (1980) 『ノラヤ』 中公文庫)
- Yamamoto, J., Okonogi, K., Iwasaki, T., & Yoshimura, S. (1969) "Mourning in Japan." *American Journal of Psychiatry*, 125, 1660-1665.